（様式１）

「絆の作り手育成プログラム研究指定校」実績報告書（１年次）

１　学校名等

学　　校　　名	福知山市立夜久野小学校						校長名	山添　麻矢	
所　　在　　地	〒629-1313　京都府福知山市夜久野町高内２６番地 電話　0773-37-0047　　ＦＡＸ　0773-37-1478								
学　　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特別支援	合　計	教職員数
学　　級　　数	1	1	1	1	1	1	1	7	11
児　　童　　数	13	16	12	12	14	20	2	89	
連　　携　　先 （文化財所有者等）	夜久野地域公民館（0773-37-1188） やくの木と漆の館（0773-38-9226）								

２　研究校の概要

本校は、福知山市の北西部に位置し、児童数８９名、生徒数４０名、全校児童生徒数１２９名の小中一貫教育校である。学級数は、１から９年生まで単学級で、特別支援学級を含めると、合わせて１０学級である。平成２５年４月に、併設型の小中一貫教育校としてスタートし、本年度で開校９年目を迎える。昨年１１月１９日には、歴代校長をはじめ、教育委員会関係者、市内外の小中高等学校の教職員を迎え、研究発表会を開催し、一定の成果を収めることができた。

児童の実態としては、全体的に落ち着いていて、学習や活動など、真面目に取り組める児童が多い。また、昨年度からＩＣＴ機器を活用した授業改善を研究の柱として進めており、児童もＩＣＴ機器を使いながらプレゼンテーションなどができるようになってきている。反面、少人数のため、多様な考えを交流する機会が少なく、自信をもって自分の考えを発表したり、身の回りの課題に気付いたりする力に弱さが見られる。

全国学力・学習状況調査（６年）、京都府学力診断テスト（４年）、標準学力調査（全学年）の結果等を見ていくと、どの学年も府平均もしくは府平均以上の数値を示し、基礎基本の力はほぼ身についていることがうかがえるが、児童一人一人を見ていくと、課題も多く、個別指導を要する児童も少なくない。

本年度は、昨年度と同様にＩＣＴ機器を活用した授業改善を研究の柱として進めており、総合的な学習の時間等を使って、「ふるさと未来学」と題し、夜久野町の特産物や産業、伝統文化や文化財等について調べ、分かったことや考えたことなどをまとめるというのが主な学習活動であった。

３　主な研究活動

１年生は、学校内の施設を探検し、２年生は、緑化センターや富久貴の滝、玄武岩公園や夜久野高原など、夜久野町内の施設を見学した。

３年生は、１・２学期を通して、夜久野の特産品の一つであるそばについて学習した。７月中旬に、敷地内にある畑にそばの実をまき、そばづくりを開始した。夏の暑さにも恵まれ問題なく成長したが、鹿にそばの花が一部食べられるというトラブルが発生し、自分たちの育てたそばが食べられた悔しさを感じつつ、農家の方々の苦労を知ることができた。１０月には、そばの実を収穫し、１１月には、地域の方に教えてもらい、そば打ちの楽しさと難しさを味わいながら、自分たちが打ったそばをおいしく食べた。

４年生は、「夜久野の祭を有名にしよう」というテーマを設定し、地域の方の話を聞いたり、神輿や法被を借りて体験したりした。また、テレビで取材を受けたときの映像や額田の山車の写真なども見せていただいた。最後に、たくさんの人に祭のことを知ってもらうためにポスターや新聞を作成した。

また、「丹波漆」の体験学習については、当初の計画では、３年生が実施する予定だったが、本年度は、３・４年生ともに実施した。１学期に「丹波漆」について教えていただき、２学期には、実際に漆かきの現場まで見学に行き、その様子を見せていただいた。その後、「やくの木と漆の館」で漆の絵付け体験を行った。漆ならではの色つやの美しさを感じつつ、自分だけのお皿を完成させた。学習後は、３年生は漆の絵付け体験について、４年生は祭について、その成果を文化祭で発表した。

５年生は、「福祉」をテーマに、身の回りにあるバリアフリーについて調べた。本校は、校内にエレベーターが配置されているなど、施設や設備面において配慮されていることに改めて気付いた。また、地域の視覚障害の方の話を実際に聞き、障害のある方の思いや願い、苦労など、学習して分かったことや感じたことを文化祭で発表した。

６年生は、上・中・下の３つの地域に分かれ、夜久野町内にある「有形・無形文化財」について調べた。コロナ禍だったこともあり、全員で文化財を見学することはできなかったものの、児童自らが家の近くの文化財を訪れ、話を聞いたり写真を撮ったりするなどして主体的に活動することができた。調べてきたことをもとにスライドを作成し、友達に自分の地域のことを伝えるため、発表会を行った。それぞれのチームで発表のねらいをもち、工夫をしながら自分の地域の文化財について伝えることができた。身近なところに貴重なものがあることに気付き、地域を大切にしようとする気持ちが高まった。

４　今年度の研究の成果と検証

全国学力・学習状況調査の質問紙調査の結果から、６年生は、国語や算数、英語など学習に対する意欲が高く、向上心も高いことがうかがえる。また、「ＩＣＴ機器を使って友達と意見を交換したり調べたりする」「ＩＣＴ機器を使うのは勉強の役に立つ」など、ＩＣＴ機器の必要性や利便性を感じている児童も多く見られる。「今住んでいる地域の行事に参加している」「地域や社会をよくするために何をすべきかを考える」など、地域に対する思いや願いも高いことがうかがえる。

他の学年においても同じようなことが言える。本年度もＩＣＴ機器を活用した授業改善を研究の柱としていたため、どの学年もＩＣＴ機器の必要性や利便性を感じており、また、地域に対する思いや願いも強い。

ただ、本年度も昨年度と同様に、コロナ禍のため、体験活動等、計画通り実施できず、児童のモチベーションを維持することが困難な状況でもあった。実際に体験するなど、五感を働かせながら体感することがいかに重要かということを痛感させられた１年であった。

児童アンケートでは、「地域の方との学習に楽しく取り組んでいる」の項目で８割以上の児童が肯定的に回答し、また、保護者アンケートでは、「学校は、地域と連携しながら教育を推進している」の項目で８割以上の保護者が肯定的に回答するなど、コロナ禍で活動が制限される中、児童も保護者も地域の方との学習や活動を楽しみにしていることがうかがえる。

５　今年度の課題

今年度の課題としては、コロナ禍のため、体験活動等、計画どおり実施できなかったことが一つ目の課題として考えられる。「百聞は一見に如かず」ではないが、実際に見たり聞いたりして、五感を働かせながら体感することは、モチベーションを維持・向上させるためにとても重要であり、その点が不十分だったことがまず課題として挙げられる。来年度は、そのことを踏まえ、計画等を立案し、ＩＣＴを効果的に活用するなど、工夫改善しながらできる限り計画的に実施していく必要がある。

次に課題として考えられるのは、「課題解決型学習」の実践である。本年度は、ＩＣＴ機器を活用した授業改善を研究の柱としていたため、「課題解決型学習」の実践まで至っていないのが現状である。昨年８月には、キャリア教育コーディネーターの小寺良介様と矢野昌則様を講師として招聘し、「わかりやすいＰＢＬのつくり方」について教えていただき、ある一定理解をすることができた。来年度は、「課題解決型学習」の実践を重点に置き、学校全体として研究していく必要がある。

６　事業終了後の研究構想

「絆の作り手育成プログラム研究指定」を夜久野小学校として受けているが、夜久野学園は、小中一貫教育校のため、以下のような組織を立ち上げ、小中合同で研究を進めていく必要がある。また、そのことが研究の推進のみならず、学習効果の更なる向上にもつながると考えられる。

夜久野学園は、「ふるさと未来学」と題して、総合的な学習の時間等を使って、夜久野の自然や歴史、文化等を学習している。小学校（１～６年生）だけでなく、中学校（７～９年）も連携・協働しながら研究を進めることは、より学習効果を高め、ふるさと夜久野への思いや願いも深まり、強いては地域への貢献度も高まると考えられる。

具体的には、上記の組織をベースに各部に分かれ、以下のような取組を実践していく。

授業改善部では、「課題解決型学習」の実践・検証することが主な取組として考えられる。具体的には、授業研等を計画的に行い、学習課題や学習方法、評価内容や評価方法を工夫改善するなど、「課題解決型学習」の実践・検証を通して、より学習効果を高める方法を探究することが考えられる。

環境整備部では、地域との連携・協働に向けて調整することが主な取組として考えられる。具体的には、「結クラブ」や「夜久野みらいまちづくり協議会」、地域公民館など、地域の関係団体と定期的に会合をもち、より充実した体験活動のあり方等について検討するなど、地域と一体となって研究を進める体制を構築することが考えられる。また同時に、地域人材バンクも作っていく必要がある。

学力充実部では、認知（非認知）能力を育成することが主な取組として考えられる。具体的には、全国学力・学習状況調査（６年）をはじめ、各種調査の結果から、認知・非認知能力における課題等を分析し、課題克服に向けての手立て等を検討することが考えられる。児童・保護者アンケートや意識調査等も活用し、心の変容を分析することも有効であり、また、そのことが更なる取組や活動の深化にもつながると考えられる。

以上のことを踏まえ、来年度は、更に小中一貫教育校のよさを生かしながら研究の深化を図っていきたい。